



島根県隠岐の島町の世界ジオパーク認定を目指すまちづくりの取り組み

記念フォーラム「神々の舞い降りし島〜自然と文化の再発見〜」

山 泰幸 Yoshiyuki YAMA

(関西学院大学人間福祉学部)

住民自らの町の価値を再発見

連携研究「自然と文化」小松班では、島根県が平成22年から3カ年の計画で実施している古事記編纂1300年記念事業の一環として、平成23年2月20日(日)に、島根県隠岐の島町において開催された記念フォーラム「神々の舞い降りし島〜自然と文化の再発見〜」に共催者として参加した。主催は地元のみちづくりNPO風待ち海道倶楽部、後援は隠岐ジオパーク推進協議会、隠岐の島町教育委員会であった。

隠岐の島町では、数年前より、地形地質・植生において特異な隠岐の自然環境と、このような自然環境において繰り広げられてきた歴史や伝

統文化を、地元の有志が調査研究し、その価値を再発見する過程で、島に對する関心と自信を深めていき、住民と役場が一体となった熱心なまちづくりの活動をしている。現在、世界ジオパーク認定を目指して、隠岐諸島をあげて取り組んでいる。

みをしている隠岐を、小松班の研究メンバーの共通のフィールドとして、あるいは対話の舞台として設定しようという意図で、現地研究会を兼ねてフォーラムを共催することになった。なお、フォーラムのコーディネーターは、小松班のメンバーで、隠岐をフィールドとしている筆者が行った。



写真1 小松和彦教授



写真2 基調講演の聴衆



写真3 飯倉義之研究員



写真4 記念フォーラムの様子(左端は筆者)

日本神話をめぐる2つの講演

フォーラムは3部構成で行われ、第1部では、2つの基調講演があった。

まず、小松和彦国際日本文化研究センター教授からは、「比較神話学からみた古事記」と題して、比較神話学・文化史的民族学の成果をもとに、日本神話の世界的な位置づけが紹介された。また、古事記に記載されている説話には、律令国家の政治性に回収されないエピソードがあること、高知県旧物部村(現、香美市)

のいざなぎ流の祭文のなかにも神話的説話があることが指摘され、多角的な観点から古事記や日本神話を捉える必要性が説かれた。

次に、韓国における古事記研究の第一人者の魯成煥韓国蔚山大学教授からは、「日本因幡と韓国梧桐島の白兎説話」と題する講演があった。

アジアにおける白兎説話のバリエーションを、構造的な観点から兎と水中動物との関係に注目し、東南アジア系と東北アジア系の2つの類型に分類。さらにベトナム、韓国、中国の説話との共通点と差異が抽出され、韓国の梧桐島の白兎説話が日本に伝播したのではないかという興味深い説が披露された。

多方面から隠岐の自然と文化を探る

第2部では、隠岐の島町から八幡浩二氏が「隠岐の自然と文化」と題して、地質地形から見た隠岐の歴史と植生について紹介があり、特に隠岐産の黒曜石とその石器について詳しい紹介があった。

村上和弘愛媛大学准教授からは、「対馬の自然と文化〜国境の島〜の

町おこしをめぐって」と題して、対馬アリアン祭の変遷について、日韓交流の変遷との関連から報告があった。

全京秀韓国ソウル大学教授からは「鬱陵島の自然と文化」と題して、鬱陵島で撮影した140枚のスライドを使って、植民地時代の痕跡が残る島の様子が紹介された。

飯倉義之日文研究員からは、「隠岐の河童、日本の河童〜町おこしと関連して」と題して、河童に関する豊富な歴史資料や、各地の町おこしの状況の紹介があった。

第3部は、報告者全員が登場し、筆者が司会で、パネルディスカッションが行われた。まず各報告者から補足があり、小松和彦教授からは、神話研究と関連して、シャーマニズムについて説明があった。また、それぞれの報告者の関心から、今後、隠岐で調査したいテーマが話され、フロアーからも関連情報が提供されるなど、活発なやりとりが行われた。隠岐の参加者の強い関心を感じた。今後の調査研究の協力関係を約束して、フォーラムを盛会に終えることができた。



写真5 白島崎展望台